

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 美術館アーカイヴからみる「内なるMLA連携」の可能性：米国での調査をもとに   |
| Sub Title        | A case study on the possibilities of inner MLA cooperation in the museums of the United States  |
| Author           | 芹澤, なみき (Serizawa, Namiki)  |
| Publisher        | 慶應義塾大学アート・センター  |
| Publication year | 2020  |
| Jtitle           | 慶應義塾大学アートセンター年報/研究紀要 (Annual report/Bulletin : Keio University Art Center). Vol.27(2019/20), ,p.209- 218  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 研究紀要  |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11236660-00000027-0209">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11236660-00000027-0209</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 美術館アーカイヴからみる 「内なる MLA 連携」の可能性 ——米国での調査をもとに

芹澤 なみき  
学芸員補

はじめに

MLA 連携という言葉が注目されるようになって久しい。ミュージアム (Museum)・図書館 (Library)・文書館 (Archives) の間の連携や協力活動を意味する MLA 連携は、地方自治体内での 3 館同士の取り組みからその枠を超えた幅広い機関によるメタデータの共有まで、さまざまな場面で見受けられる。とりわけデジタル化が急速に広がる昨今では、ネットワーク上での連携の重要性が広く認識されており、連携のあり方も多様化してきた。本稿ではこうした状況を踏まえて、筆者が 2019 年夏に調査したアメリカでのいくつかの事例をもとに、MLA 連携の中でも、特に個々の美術館の内部で行われている「内なる MLA」連携について考えてみたい\*1。

## 1. MLA 連携と内なる MLA 連携

MLA 連携とは

本論に入る前に、まず MLA 連携の意味とこれまでの歴史をごく簡単に整理しておく\*2。ミュージアム (Museum)・図書館 (Library)・文書館 (Archives) はいずれも文化的情報資源の収集・保存・提供という点で共通の目的と課題を有することから、それぞれの頭文字をとって、組織間の互助・協力活動が MLA 連携とよばれる。1989 年の設立当初から MLA 連携を継続的に提唱してきたアート・ドキュメンテーション学会 (JADS) などの組織もあるが、2008 年に IFLA と OCLC から MLA 連携に関する報告書\*3 が出されたのを契機として国際的に関心が高まり、日本でもその後 MLA 連携に関する重要な書籍が相次いで刊行されるなど\*4、2010 年前後に広く注目されるようになった。また、2011 年に起こった東日本大震災では記録の重要性が再認識されたことから、個々の組織の枠組みを超えた連携の必要性が認識されるようになった。その後も、2017 年には OCLC Research が MLA の相互理解や連携の拡大を目的とした調査報告書\*5 を公開し、日本では自治体内での積極的な組織間連携が図られるなど、MLA 連携の活動は国内外で継続されている\*6。

とりわけ注目されるのは、情報資源のアーカイヴ化やネットワークを通じた情報提供の促進などの、デジタル面における連携である。近年では、組織や分野を横断してコレクションを検索できるデータベースやデジタルアーカイヴなどの進展が目覚ましい。海外では、欧州の文化資産の統合ポータル「ヨーロッパアナ (Europeana)\*7」やアメリカの図書館・古文書館による統合ポータル「アメリカデジタル公共図書館 (DPLA)\*8」などがその例として挙げられる。日本でも、組織横断的にさまざまなコンテンツのメタデータの検索を可能

にする分野横断型統合ポータル「ジャパン・サーチ」が2020年の正式な運用開始にむけて進行中である\*<sup>9</sup>。

さらに、こうした動きに平行して MLA に大学 (University) と産業界 (Industry) を加えた MALUI 連携も提唱されており、MLA に限らず幅広い連携による文化資源の共有化と活用を重視する動きもみられる\*<sup>10</sup>。

### 内なる MLA 連携

上記のような、それぞれ独立した組織や機関の間のいわゆる「外なる」MLA 連携に対して、ひとつの組織や機関の中に MLA の要素が含まれていることを「内なる」MLA 連携とよぶことがある。美術館においては、美術作品の収集・保存・公開という目的の実現と、調査研究のための支援の機能のために、ミュージアム自体の中にライブラリとアーカイヴを含みもつことでトライアングルを形成することが、内なる MLA 連携にあたる\*<sup>11</sup>。こうした美術館の内なる MLA の関係を図式化すると図1のようになる。M にあたるのが作品であり、学芸課の学芸員がこれを管理している。L にあたるのが図書資料、A にあたるのが資料であり、それぞれ、コレクションを管理するライブラリの司書、アーカイヴ課のアーキビストがいる。

内なる MLA 連携の具体例としては、まず図書や資料の展示を含む展覧会が挙げられる。かつて、美術館では作品のみが展示される傾向にあったが、今では、作品に加えてライブラリが所蔵する本や、エフェメラ (一過性資料)、書簡といっ

美術館における「内なる」MLA連携

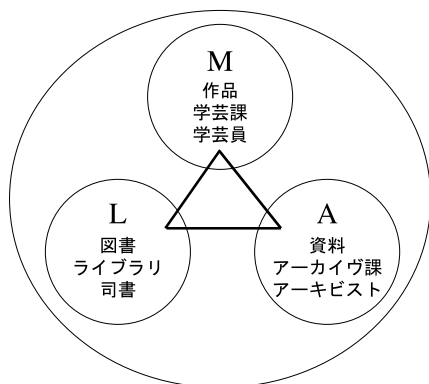


図1 美術館における「内なる」MLA 連携 (水谷長志. アート・アーカイヴ再考——〈外なる/内なる〉二つのトライアングルをめぐる。戦後の日本における芸術とテクノロジー 平成16-18年度科学研究費補助金 (基盤研究(B)) 研究成果報告書. 2007年3月, p.90. 図6をもとに一部変更)

たアーカイヴ課所蔵の資料が並置された資料展示が一般的になりつつある\*<sup>12</sup>。また、これら3つのコレクションを横断的に検索できるデータベースの構築やそれぞれのコレクション・マネジメントの連携などもその一例といえよう。

## 2. アメリカでの調査

### 背景と目的

こうした内なる MLA 連携が有益であるのは言を俟たないが、それでは国内外の美術館では実際にどのような取り組みが行われているのだろうか、連携にはどういった具体的メリットあるいは課題があるのだろうか。こういった問題意識のもとで、アメリカの美術館で調査を行なった\*<sup>13</sup>。

MLA には共通点がみられる一方で、その性質や機能の違いから相互の連携が難しいという指摘もある。しかしアーカイヴ (A) は、その資料的性質から図書館 (L) と馴染みやすく、また、書籍をはじめとする出版物とは異なり資料の希少性が高い点その形態が多様である点からミュージアム (M) とも相性がいいとされている\*<sup>14</sup>。つまり、A には L と M をつなげる機能があるといえる。このことから筆者は、美術館のアーカイヴを調査対象の中心に据え、その内容や活用例をたどることによって美術館の内なる MLA 連携を検討する手がかりが得られるのではないかと考えた。調査にあたっては、筆者の研究対象がイタリア、初期ルネサンスの祭壇画であることから、14-15世紀のイタリア絵画を所蔵している美術館を調査対象とした。また、近年の MLA 連携の動向を受けて、アーカイヴのデジタル化やデータベースへの反映などデジタル面での MLA 連携にも着目した。以下では、フィラデルフィア美術館、メトロポリタン美術館、フリック・コレクション、ブルックリン美術館で調査した内容をケーススタディとして紹介したい。フィラデルフィア美術館とブルックリン美術館では学芸課が管理するアーカイヴを、メトロポリタン美術館では美術館の機関アーカイヴを、そしてフリック・コレクションではその双方のアーカイヴを閲覧した。加えて、美術館ではないがアーカイヴについて興味深い活動を行なっている機関として、プリンストン大学のインデックスを最後に取り上げる。

### a. フィラデルフィア美術館 (Philadelphia Museum of Art)

1876年に創設されたフィラデルフィア美術館は、全米でも有数のヨーロッパ美術のコレクションであるジョンソン・G・コレクションを有している。今回の調査では、その中のひとつ、15世紀フィレンツェで活躍した画家フラ・アンジェ

リコ（派）による《聖グレゴリウスに示された教皇権》に関するアーカイヴとして、ヨーロッパ絵画・彫刻部門の学芸課が保管する作品ファイルを閲覧した。その中には、本作品や関連作品の写真、作品に関する論文、カタログの一部のコピー、メールの文面を印刷したもの、手紙、コンディション・レポート、本作品が出品された他の美術館での展覧会ウェブページの印刷など、同課の学芸員が収集した約30種類のアーカイヴ資料が取められていた（図2）。作品ファイルは学芸課が管理する唯一のアナログ資料であるという（図3）。

資料のデジタル化について同課のヒューズ氏に伺ったところ、これらのファイルは大部分がデジタル化されておらず、



図2 フラ・アンジェリコ（派）《聖グレゴリウスに示された教皇権》（1435年頃）作品ファイル（筆者撮影、Courtesy of Philadelphia Museum of Art）



図3 ヨーロッパ絵画・彫刻部門の学芸課オフィスに保管された作品ファイル（筆者撮影、Courtesy of Philadelphia Museum of Art）

それに向けた具体的なプランもないという。その背景には、実物の方が手でめくって確認しやすいというメリットもあるようだ。ただし、この作品を収集したコレクターのG・ジョンソンに関するアーカイヴをデジタル化するプロジェクトでは、現在までに64作品のファイルがすでにデジタル化されている<sup>\*15</sup>。また同プロジェクトの一環として、2018年にはフィラデルフィア美術館初のボーン・デジタルの書籍が刊行されており<sup>\*16</sup>、エッセイ、作品情報、アーカイヴ・マテリアルといったコンテンツを含む800ページを超える本著作は、「コレクター」というひとつのテーマを軸にMLAの各要素が結集された一例といえよう。

なお、フィラデルフィア美術館で行われている内なるMLA連携として、デジタル面ではデータベースの共有、アナログ面ではライブラリ課とアーカイヴ課によるライブラリでの合同企画展の実施やレコード・マネジメントにおける人的連携を挙げておきたい。当館ではTMS Collectionsというデータベースシステムをさまざまな課で共有しており、編集できる部分を課によって分担しているようだ。例えば、作品管理マネージャーのクリスチャン氏に話を伺ったところ、彼らの部署では主に移動歴の項目についてのみ、記入や編集する権限があるという。担当箇所は分かれているが、一つのシステムを共有している点でMLA連携の重要な素地となっている。合同企画展に関しては、2019年に開催された2つの展覧会はいずれもアーキビストや司書、図書館スタッフのキュレーションによるもので、ライブラリ課とアーカイヴ課の連携がみられる<sup>\*17</sup>。また、アーキビストがデジタルおよび紙媒体の資料に関する適切なレコード・マネジメントをミュージアム・スタッフに指導しており、人的連携もとれているように感じられた。

#### b. メトロポリタン美術館（The Metropolitan Museum of Art）

世界有数の私立美術館として知られるニューヨークのメトロポリタン美術館では、15世紀フィレンツェ美術を代表する画家フラ・アンジェリコに焦点を当てた展覧会「Fra Angelico」（会期：2005年10月26日-2006年1月29日）に関するエフェメラ<sup>\*18</sup>をミュージアム・アーカイヴズ課で閲覧した（図4,5）。この課は、歴代の館長などスタッフ関連の資料を含む、ミュージアム自体に関する資料（理事会の議事録、法律文書、美術館の刊行物、プレスのクリッピング、エフェメラ、書簡など）を中心に扱っている。今回閲覧したエフェメラには、放送原稿、雑誌、新聞各紙に掲載された展覧会レビューのコピーなど、およそ20点の資料が含まれていた。これらは、

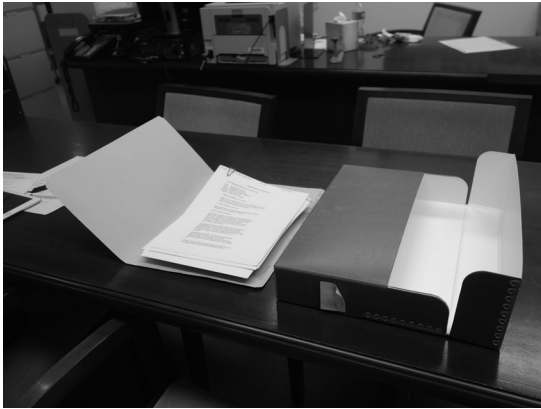


図4 メトロポリタン美術館で開催された展覧会「Fra Angelico」(会期：2005年10月26日-2006年1月29日)に関するエフェメラ(筆者撮影、Courtesy of The Metropolitan Museum of Art Archives)



図5 メトロポリタン美術館、ミュージアム・アーカイヴ課のオフィス(筆者撮影、Courtesy of The Metropolitan Museum of Art Archives)

もともとミュージアム・ライブラリの司書によって収集・保管されたものが、一定の期間を過ぎてアーカイヴとしてミュージアム・アーカイヴズ課に移されたものであり、美術館内でのLとAの連携がうかがえる。こうしたLとAの連携はスタッフ個人にもみられ、例えば同課のアーキビストであるポーリング氏は、図書館情報学とミュージアム・アーカイヴ双方の修士号を取得しているという。

ポーリング氏に展覧会関連の資料のデジタル化について話を伺ったところ、自館で開催した展覧会のプレスキットなどの一部を除きデジタル化されていないものが多いようだ。また、今回閲覧したような他機関による資料については、デジ

タル化の予定はないという。

### c. フリック・コレクション (The Frick Collection)

フリック・コレクションは、実業家ヘンリー・フリックの邸宅を利用して、彼が収集したコレクションを所蔵する私立美術館である。当館にはフィリッポ・リッピやピエロ・デッラ・フランチェスカといった初期ルネサンスの画家による作品が所蔵されていることから、これらの作品に関して学芸課とアーカイヴ課の2つの部署が管理するファイルを開覧した。ここではフィリッポ・リッピ《受胎告知》(1440年頃)に関するアーカイヴを取り上げて、2つの課が保管する資料について具体的にみていきたい。

まずアーカイヴ課のファイルには、理事会の関連資料、手紙、メモ、アナウンスメント文章などの資料が保管されており、作品の入手や購入に関する資料が中心だった(図6)。これに対して学芸課の作品ファイルには、写真類、論文記事の

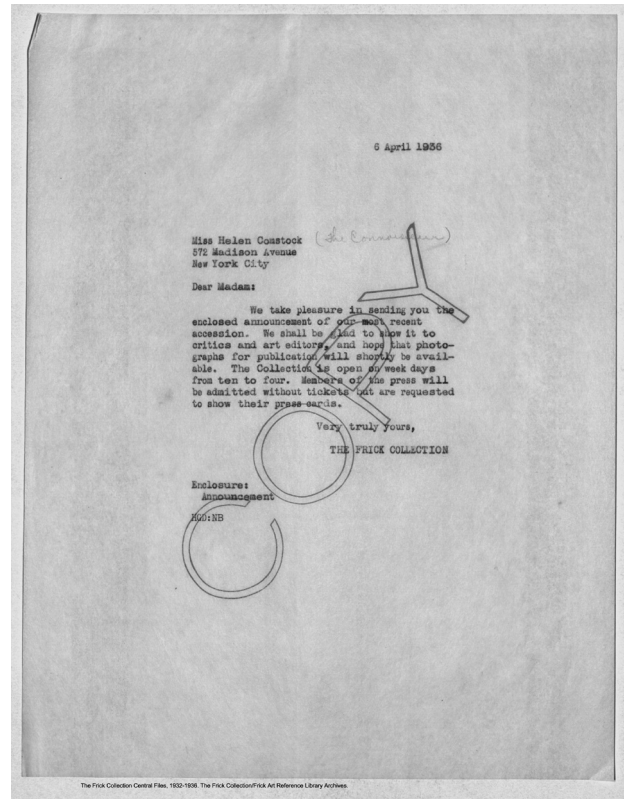


図6 ファイル資料の一部、1936年4月6日にフリック・コレクションからヘレン・フリックに宛てた手紙(Courtesy of The Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives)

コピー、他館への貸し出しにあたってのやりとりを示す文書などが保管されており、他の美術館の作品ファイルと同様の内容であった。これらの資料はデータベース上から検索することができないため、アーカイブ課のスタッフと直接やりとりをする必要があり、今回はスタッフの計らいによって学芸課のファイルも合わせて閲覧することができた。アーカイブ利用者の中には、筆者のように、特定の作品を起点に調査を進める場合も少なからずあることが想定されるため、こうした人的連携は利用者にとっての利便性を高めるものといえよう。

フリック・コレクションではデジタル面の整備も進んでいるが、フォトアーカイヴやアーカイヴのデジタル・コレクションに加えて、テーマごとに特化したデータベースにもアーカイヴが活用されている。例えばアメリカのコレクターに関するデータベースでは、今回筆者が閲覧した資料に関するコレクターの情報も検索することができ<sup>\*19</sup>、美術作品とアーカイヴを紐づけるのに役立っている。さらに、フリック・コレクションの検索機能によって同じページからライブラリの蔵書検索も可能なため、1つのウェブページでMLA全ての検索が可能となっている。

なお、内なるMLA連携の例ではないが、他機関との外なる連携に関する興味深い取り組みとして、デジタル・アート・ヒストリー・ラボ (DAHL)<sup>\*20</sup> というプロジェクトが展開されている。これは、美術史家が新たなアプローチを試みる際に必要なデジタル・ツールやデータの提供を目的とし、文献管理ソフトウェアのzoteroと連携してデジタル・アート・ヒストリーに関するビブリオグラフィーなどを提供するものである<sup>\*21</sup>。DAHLにはコンピュータ・サイエンスや歴史地理情報システム (GIS) といったさまざまな専門領域の研究者と美術史家の連携を促す意図があるとのことだが、MALUI連携にも注目が集まる昨今、興味深い一例といえよう。

#### d. ブルックリン美術館 (Brooklyn Museum)

ニューヨーク、ブルックリン地区に位置するブルックリン美術館は約150万点の作品を所蔵しており、メトロポリタン美術館に次ぐニューヨークで2番目に大きい美術館として知られる。所蔵作品はエジプト美術から現代アートまで多岐にわたり、ロレンツォ・ディ・ニッコロやザノービ・ストロツィをはじめとする15世紀のイタリア絵画も所蔵されている。筆者は、同館にある倉庫で聖ラウレンティヌスの生涯を描いたロレンツォ・ディ・ニッコロによる一連のプレデッラ

パネルを閲覧し、その後、ヨーロッパ美術部門の学芸課オフィスでその作品ファイルを閲覧した(図7)。ファイルには、修復記録、歴代のキャプション、論考の原稿、メールのやり取り、作品情報シート、手紙、写真屋へのオーダーフォームなどがファイリングされており、およそ28点の資料が保管



図7 ロレンツォ・ディ・ニッコロ《聖ラウレンティヌスの生涯》(1412年頃)、サーノ・ディ・ピエトロ《謙譲の聖母》(1440年代初頭)、ザノービ・ストロツィ《聖母子と4人の天使》(1450年頃)の作品ファイル(筆者撮影、Courtesy of Brooklyn Museum)

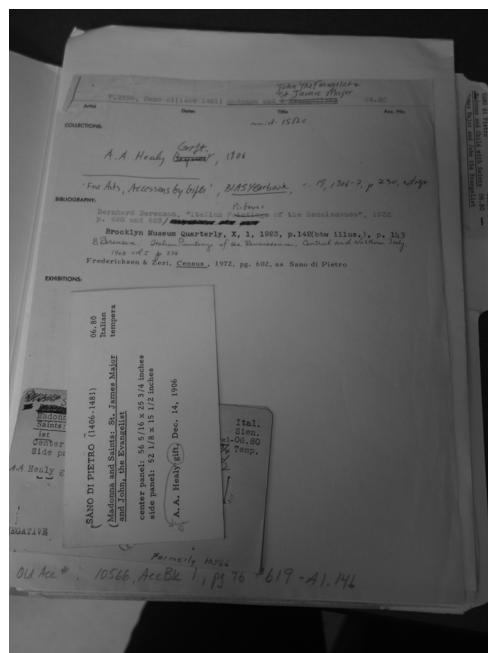


図8 ファイル資料の一部、作品の目録カードなど(筆者撮影、Courtesy of Brooklyn Museum)

されていた(図8)。

ブルックリン美術館のデータベースからは、作品、画家、展覧会記録、アーカイヴを横断的に検索することができる。しかし、例えば今回の調査対象であったロレンツォ・ディ・ニコロの名前をサーチに入力しても該当するアーカイヴ資料はなく、またヨーロッパ絵画彫刻部門のアーカイヴのファインディング・エイド\*<sup>22</sup>をみてもロレンツォ・ディ・ニコロの名前はヒットしない。データベースとしては作品やアーカイヴなどを網羅的に検索できる仕組みとなっているが、実際の検索機能としてはいまだ十分とはいえないだろう。

#### e. プリンストン大学インデックス (The Index of Medieval Art, Princeton University)

1917年に創設された通称インデックスとよばれるプリンストン大学キリスト教美術画像学研究所は、初期キリスト教時代から16世紀までの中世美術に関する画像および情報のアーカイビングを行っている。目録カード(図9)とデータベースによって、およそ350,000点にわたる画像データ(図10)と作品データが管理されており、この領域では世界有数のアーカイヴを擁する研究所として知られる(図11)。近年では膨大な数にわたる資料のデジタル化を行っており、その取り組みは美術に特化したアーカイヴのデジタル化において、ひとつのモデルケースとなっている。

現在進行中のデジタル化について同研究所の職員であるロッシ氏に話を伺った。アーカイヴのデジタル化は1990年から進められ、これまでに全体量のおよそ20-25パーセント

がデジタル化されてきたという。現在のデータベースは2年前から運用されている2代目のものだが、細かいフィルターを設定でき、絞り込み検索が可能となっている(図12)。また、デジタル化の作業は長期にわたるため、デジタル化された資料には印を押してまだデジタル化されていない資料との区別を徹底し、さらにアルバイトの学生が確認作業を行っているが、実際の資料と登録されたデータの同一性をいかに保つかは、デジタル化における大きな問題のひとつであるという。また、デジタル化されたデータの一貫性を保つことも課題であり、特に言葉や内容の正確さを重視しているようだ。さらに利用者の利便性を考えて、カード目録が作成されたときに

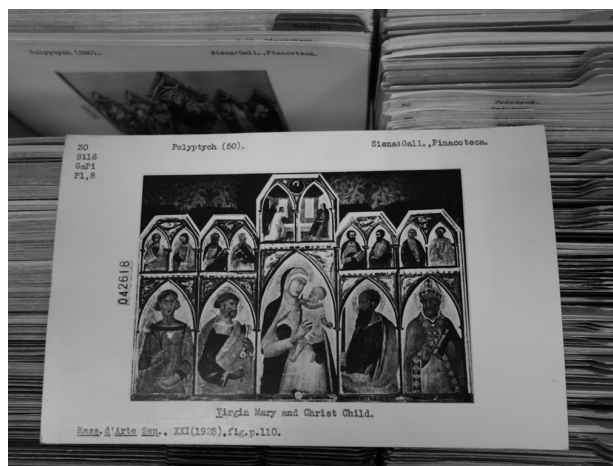


図10 画像データ(筆者撮影、Courtesy of The Index of Medieval Art, Princeton University)



図9 目録カード(筆者撮影、Courtesy of The Index of Medieval Art, Princeton University)



図11 カード目録が取められたカードボックス(筆者撮影、Courtesy of The Index of Medieval Art, Princeton University)

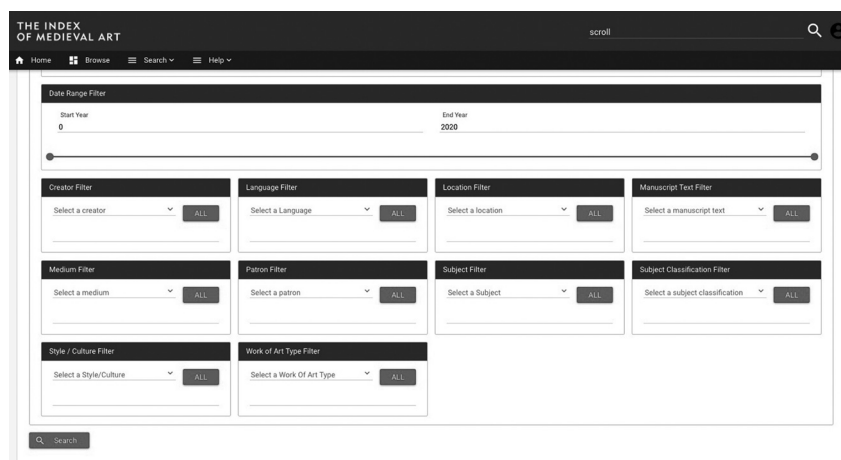


図12 データベースのフィルター（取得日：2019年8月3日、Courtesy of The Index of Medieval Art, Princeton University）

用いられていた用語と現在用いられる用語に変化がみられる場合には現在の用語に合わせる、複数の言い方がある場合にはそれらが全てヒットするように設定する、などの工夫がなされている。

アーカイヴの一貫性を保つための努力は人的側面にもみられる。インデックスの職員は美術史、アーカイヴ、プログラミングなどを専門としており、それぞれの立場から業務の見直しや決定を行なうために、そして業務の進行状況を共有するために週に1回全員でミーティングを行うことが非常に重要であるという。

ほかにも、他の出版機関と共同で美術史に関する雑誌や書籍を刊行するなど、他機関との積極的な連携もみられる<sup>\*23</sup>。インデックスの資料は、美術史研究のためのアクティブなアーカイヴとなっているといえよう。

### 3. 内なる MLA 連携の課題

#### デジタル面での連携

デジタル面では、まず、データベースを整理して MA を横断する検索機能を構築することが有効であると感じた。フリック・コレクションのように同じウェブページに L のデータベースがあれば MLA を一括して検索できるため、さらに利便性が高まる。ただし、資料数が膨大になる場合にはタグを付与して絞り込み検索を可能にするなど、少ないノイズで検索できるよう工夫も必要だろう。データベースの構築にあたっては典拠コントロールも課題であるが、この点に関してはインデックスが実践している記載ルールや表記統一の取り組みがひとつのモデルケースとなろう。また、フィラデ

ルフィア美術館のように管理用に内部向けのデータベースを各課の間で共有することも大切である。さらに、データベースの整備に先駆けて、メタデータを整理していくことの重要性も指摘しておきたい。利用者はまず探している情報を何らかの形で検索するはずだが、その際にキーワードとなる画家や作品の名前がヒットしなければ関連するアーカイヴに辿り着かないからである。例えば、フリック・コレクションのフィリッポ・リッピの《受胎告知》に関してアーカイヴ課が所有するファイルには、美術史家バーナード・ベレンソンが本作品について短い考察を述べた手紙が含まれていた。これは美術史研究にとって貴重な情報であるが、オンライン上で閲覧できるファインディング・エイドにはファイル名しか記載がないため、この手紙の存在はわからない<sup>\*24</sup>。今回の調査を行なった全ての館でファインディング・エイドが作成されているので、今後はファイルに収められた個々の資料もヒットするよう、さらに詳細な資料内容が記載されることを期待したい。

#### アナログ面での連携

アナログ面では、まず、整理分類方法における連携が重要である。美術館が扱う作品は多岐にわたるため、メトロポリタン美術館のボーリング氏も指摘するように美術館によって分類方法が異なる。たしかに、所蔵作品のジャンルやマテリアルの多様性から全ての美術館に共通する分類法の確立は現実的ではないが、それぞれの館の特徴を生かして館内の作品・資料・図書を保存管理していくことは可能であるように思われる。L の図書館情報学や A のアーカイヴズ学の観点か



ら資料組織のノウハウを活かしたコレクション・マネジメントが望まれるが、その際に欠かせないのは、インデックスのロッシ氏が述べているように人的連携を密にとって情報共有していくことである<sup>\*25</sup>。合わせて、フィラデルフィア美術館で行われているように、アーキビストによるコレクション・マネジメントのレクチャーなども効果的であろう。アーカイヴについては、その数が膨大になっていく中で、保存の優先順位を決めていく必要も想定される<sup>\*26</sup>。

作品や資料の保存管理と同時に、その活用についても連携が考えられる。作品を公開するという美術館の役割は大きい。美術館のAとLにも、“作品”的な側面があることを改めて強調しておきたい。アーカイヴといってもメモからオブジェクトまで形態はさまざまであり、時には作品との境がつきにくくなることもある。また、美術館のライブラリが扱う図書は多様であり、書店で流通されることがなく灰色文献の一種とされる展覧会カタログや、バラエティに富んだ形状のデザイン性の高い図書など、希少価値が高い図書も少なくない。こうしたアーティスティックな資料や図書は時に“作品”として展示される機会が増えていることから、「魅せる」連携の持つ意味は大きい。

今回、アーカイヴを中心に調査を行なったが、その資料の多さを再認識するとともに、まだデジタル化されていない資料が多いことに驚かされた。アーカイヴのデジタル化は昨今もっとも注目度の高いトピックであるが、こうしたデジタル化されていない資料の数と内容の豊富さを考えると、アナログ面での連携の重要性は看過できない。

### 内なる MLA 連携の意義

外なる MLA 連携の大きな課題のひとつは、それぞれが重視する点が異なるということだ。MLA 連携のさきがけとされる英国の博物館・図書館・文書館国家評議会が2010年に廃止された背景には、職員数や予算が限られた中で、館種の違いを越えて連携を行う相互互恵的なメリットを見出すことの難しさがあったとされる<sup>\*27</sup>。こうしたことから、MLA 連携については懐疑的な意見や MLA 連携を前面に出すことの危険性を指摘する見解もある。MLA 連携のメリットを何に見出すのか、という根本的な問いは内なる MLA 連携にもあてはまるが、以下の点にそのメリットを見いだせるのではない。

まず、研究や教育などの面における利用者のメリットが挙げられる。MLA の分類は扱う対象の違いによって異なっているが、1つのテーマを調べる際には、MLA を総合的に調

査した方がよりよい結果が見込まれる<sup>\*28</sup>。これは美術館内の MLA 連携にも当然あてはまり、美術史家は作品だけではなく関連する図書や資料も参照する必要があるため、総合的な MLA の有用性に疑いの余地はない。

しかし、内なる MLA 連携の意義はこうした利用者にかかわるメリットに限定されたものではないだろう。美術館は作品を保存・展示する機関と思われることが少なくないが、実際にはその作品に付随するアーカイヴ資料や文献も合わせて所蔵している館が多い。これらの作品・資料・文献が相互に関連づけられていけば、それぞれが有する意味やコンテキストは一層豊かさを増し、ひいては美術館全体の文化的価値の向上にもつながっていくだろう。そして、美術館内の MLA を有機的に結びつけていく際に、とりわけ大きな役割を担う可能性があると考えられるのがアーカイヴである。今回の調査では、修復記録やコンディション・レポートに記載された作品情報以外にも、アーカイヴを通じて作品周辺に広がるさまざまな情報を得ることができた。その一部として挙げられるのが、他作品との関連について言及された手紙のやりとりや芸員らのメモ、金額という形で作品の価値が明確化された作品の購入記録、過去の作品の状態や当時の展示風景を記録した写真などである。他にも、メトロポリタン美術館のアーカイヴでは、一連の展覧会レビューによってその展覧会がどのようにメディアに受容されたのかを垣間見ることができた。またフリック・コレクションのデータベースでは、作品に加えてアーカイヴ資料やフォトアーカイヴも一括して検索でき、作品の周辺に広がる豊かなコンテキストを知ることができた。このように、A を拡充することによって MLA の有機的連携を実現することができれば、作品それ自体にとどまらない美術館の文化的価値が一層の厚みをもっていくことが期待される。

以上のように、内なる MLA においても連携の意義は十分にあると言える。たしかに、連携にあたっては管理する側の足並みを揃えることが難しいという現実もある。しかし、ここで改めて確認しておきたいのは、求められているのが組織の形式的統合ではないということだ。あくまでそれぞれの専門性・主体性を保った上で、包括的連携を図っていくことが重要である。

### おわりに

日本でも近年、2018年の著作権法改正によって美術館が所蔵する作品のサムネイル画像をインターネット上で公開することが可能になるなど、MLA 連携に関連する動きがみら

れる。特に最近では、MLA を横断する画期的なデータベースとしてジャパン・サーチの開発が進められており、MLA 連携に新たな可能性（価値）をもたらすものとして大きな注目を浴びている。現時点でジャパンサーチに紐付けされている美術館の数が少ないといった課題もみられるが\*29、こうした外なる MLA 連携の重要性は言うまでもない。しかしながら、このような外なる MLA 連携と合わせて、美術館における内なる MLA 連携の充実化を図っていくことも、美術館それ自体の総体的価値を一層高めていく上で極めて重要であろう。そこでは、A、すなわちアーカイヴこそが MLA の有機的連関を推進する主導的役割を果たしうるように思われる。

#### 註

- \*1 本稿は、「米国研究助成プログラム 2019」（日米協会）の助成を受けて 2019 年 8 月 8 日-20 日にかけてアメリカで行なった調査内容に基づくものである。
- \*2 MLA 連携の定義については下記を参照。  
“MLA 連携”. 文部科学省. 用語解説. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm), (参照 2020-4-7).  
“MLA 連携”. 図書館情報学用語辞典 第 4 版. 日本図書館情報学会用語編集委員会編. 丸善出版, 2013.
- \*3 Zorich, Diane, Günter Waibel and Ricky Erway. Beyond the Silos of the LAMs: Collaboration Among Libraries, Archives and Museums. OCLC Programs and Research, 2008, <http://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.140.8022&rep=rep1&type=pdf>, (参照 2020-4-7). 京都大学図書館情報学研究会による邦訳版もでている。 <https://archive.ifla.org/VII/s8/pub/Profrep108-jp.pdf>, (参照 2020-4-7).
- \*4 MLA 連携の成果がまとめられた書籍として、水谷長志編. MLA 連携の現状・課題・将来. 勉誠出版, 2010; 日本図書館情報学会研究委員会編. 図書館・博物館・文書館の連携, シリーズ図書館情報学のフロンティア No.10. 勉誠出版, 2010; NPO 知的資源イニシアティブ編 デジタル文化資源の活用 地域の記憶とアーカイブ. 勉誠出版, 2011; 石川徹也・根本彰・吉見俊哉. つながる図書館・博物館・文書館—デジタル化時代の知の基盤づくりへ—. 東京大学出版会, 2011, などが挙げられる。
- \*5 *Collective Wisdom: An Exploration of Library, Archives and Museum Cultures*. OCLC Research. 2017, [\[lam-culture.html\]\(http://lam-culture.html\), \(参照 2020-4-7\).](https://www.oclc.org/research/publications/2017/oclcresearch-collective-wisdom-</a></li>
</ul>
</div>
<div data-bbox=)

- \*6 2018 年 7 月にニューヨークで開始された“Culture Pass”の取り組みや、2019 年 7 月に締結された長野県の県立長野図書館と信濃美術館の間の連携協定など、国内外でさまざまな動きがみられる。
- \*7 <https://www.europeana.eu/en>, (参照 2020-4-7) .
- \*8 <https://dp.la/>, (参照 2020-4-7) .
- \*9 <https://jpsearch.go.jp>, (参照 2020-4-7) 図書館、博物館・美術館、文書館、大学・研究機関などの情報資源の連携を目指すジャパン・サーチは、2019 年 2 月から試験版が公開され、2020 年に正式版が公開される予定である。
- \*10 代表的な例として「にいがた MALUI 連携・地域データベース」を挙げておきたい。
- \*11 水谷長志. 美術資料における〈外なる/内なる〉ネットワークを考える. 現代の図書館. Vol.34, No.3, 1996, p.151. 水谷氏はこれまで内なる MLA 連携について数々の考察を行なっている。
- \*12 水谷長志. MLA 連携は美術館の展示空間を少し変えたような…竹橋の近代美術館での私のキャリアから. 情報知識学会誌. Vol.30, No.1, 2020, p.62-67.
- \*13 なお、2017 年 10 月-2018 年 5 月にかけて筆者が東京都美術館でアーカイヴの整理作業に携わった経験がこのような問題意識を持つきっかけとなった。
- \*14 田窪直規. 博物館・図書館・文書館の連携、いわゆる MLA 連携について. 図書館・博物館・文書館の連携. No.10, 2010, p.1-22. アーカイヴの立場から MLA 連携を論じたものとしては、杉山 正司. MLA 連携へのアプローチ：A の視点から. 國學院雑誌. Vol.118, No.11, 2017, p.70-78 などが挙げられる。
- \*15 <https://archives.philamuseum.org/jgj#papers>, (参照 2020-4-7).
- \*16 Atkins, D. M. Christopher; Thompson, A. Jennifer; Tucker S. Mark; Strehlke, Carl Brandon; Rice, Emily. *The John G. Johnson Collection: A History and Selected Works*. Philadelphia Museum of Art, 2018. <https://publications.philamuseum.org/jgj/voll>, (参照 2020-4-7).
- \*17 2019 年に開催された展覧会 A Surreal Archive: Celebrating the Young-Mallin Collection (October 30, 2018-April 9, 2019); Past Futures: Innovative Design and the Philadelphia Museum of Art (November 5, 2019-April 10, 2020) はいずれもライブラリ課とアーカイヴ課の企画によるものである。
- \*18 Box 327, Folder 2, The Metropolitan Museum of Art

- 
- historical clippings and ephemera files, The Metropolitan Museum of Art Archives, New York, <https://library.metmuseum.org/record=b1704724~S1>, (参照 2020-4-7).
- \*19 Archives Directory for the History of Collecting in America. <https://research.frick.org/directory>, (参照 2020-4-7).
- \*20 The Digital Art History Lab. <https://www.frick.org/research/DAHL>, (参照 2020-4-7).
- \*21 DAHL Zotero Library. [https://www.zotero.org/groups/525911/frick\\_art\\_reference\\_library\\_digital\\_art\\_history\\_lab/library](https://www.zotero.org/groups/525911/frick_art_reference_library_digital_art_history_lab/library), (参照 2020-4-7).
- \*22 ファインディング・エイド (Finding Aid) は資料を探す際の検索手段であり、アメリカでは多くの美術館でアーカイヴのファインディング・エイドが作成されている。
- \*23 ウェスタンミシガン大学 Medieval Institute Publications やペンシルバニア州立大学出版局と協力して出版活動を行っている。
- \*24 ファイル「Board of Trustees, 1920-31 Acquisitions — Lippi, Fra Filippo, “Annunciation”, 1924 Includes copies w/redacted」に含まれていた。
- \*25 近年ではとりわけデジタル面における MLA 連携が注目される傾向にあるが、人的なつながりや交流の重要性が看過できないことが指摘されている。古賀崇. 「MLA 連携」の枠組みを探る—海外の文献を手がかりとして. 明治大学図書館情報学研究会紀要. No.2, 2011, p.7.
- \*26 例えば、京都大学研究資源アーカイブ (KURRA) は現物資料を保存せずにデジタル化のみ行っている。KURRA の取り組みについては、谷合佳代子. 研究の記録管理と資料保存：京都大学研究資源アーカイブの事例から. 博物館学芸員課程年報. 追手門学院大学, No.32, 2018, p.37-41 が詳しい。
- \*27 カレントアウェアネス -E1407. 2013年03月07日. 図書館, ミュージアム, 文書館の新たな連携に向けて<報告>. <https://current.ndl.go.jp/e1407>, (参照 2020-4-7).
- \*28 安達匠. MLA 連携緒論. 國學院雑誌. Vol.116, No.3, 2015, p.60-61.
- \*29 特に私立博物館、美術館とのさらなる連携が課題とされている。徳原直子. 博物館・美術館にとっての「ジャパンサーチ」とは? (特集 博物館・美術館の図書室をめぐって). 現代の図書館. Vol.57, No.3, 2019, p.167-175.